

大震雜感

坂内ミツ

○伏見丸は八月廿八日横濱を出帆して歐洲航路に向ひ神戸に寄港した、九月一日突如としてあの大地震大火の悲報は傳へられた、船中の人は等しく驚愕した、續々として至る慘憺たる報導にじつとしては居られなかつた、殊に東京横濱方面に妻子を残して居る人は一刻も猶豫する事が出来ぬ、凡てを抛擲して下船し歸途をいそいだ、事務長某は東京本所に住宅があつた老母と幼い子供を抱いて居る留守宅はたしかに被服廠跡に避難したに相違ない、それが何より安全である、あの廣場ならばと幾分慰めて居るひまなくあの被服廠跡の慘憺たる模様が耳にはいつた、どうしてぢつとして居られやう、母の上妻の上愛子の上を考へては何物も顧慮して居られぬ、時によつたら一命はとりとめたかもしれぬけれども住むに家なく食ふに食ふ

く自分の歸りを待つて居るに相違ない、すぐにも職を捨ててかへらう、しかして待てよ此船は私のものではない、船員一人でも下船してしまへば船は進行する事が出来ぬ、船には多くの外人も乗つてゐる急用を帯びて急いで居る人もある、豫定の日程を變更する事は出来ない、職務のためには私を犠牲になければならぬ、あゝ行かねばならぬ職務のために、と涙を揮つて神戸を出帆した、果せる哉、此事務長の家族は女中一人が辛うじて生き残つただけで皆被服廠跡にてあえなき最後をとげられた、この報知を得られた時の事務長の心は如何であらう、會社も慰すべき言葉があいとの事である、しかも長き六ヶ月の航海は三月のはじめにならねば歸る事が出来ぬ、定めし今頃は遠く海外にあつて愛子の事を思ふて居らるゝであらう

こうした境遇に居られたのは獨この事務長ばかりではない多くの船員の中には同じ思ひに泣いた人が少くあかつた。

○夢にだに思ひ及んだ事のあい大震災に人々生きた心地もなく町内の人々安全な高臺にとあつまつた、時既に五ヶ所に煙があがつた、火事ではあるまいかといふ間もかく烈風にあはらるゝ火の手は遠慮なく燃えひろがつた、水道は一滴も出ない井戸はない、潰れ家の多い神田は見て居る内に猛火につつまれ一面の火の海と化した、風下にある本郷の高臺ことに弓町あたりは忽ち火をかぶつた、早く避難せよ危い危いと呼びまはる青年團員の聲は悲しかつた、總ての家は老人や子供に怪我させまいと僅かの荷物を背負つて逃れ去つた、不安に満されながらも男子の多くは現場を去らなかつた、又家族を避難させた人も大方すぐに歸つて來た、時既に火の手は猛威を揮つて一方お茶の水の方に進行し一方は北の方弓町におしよせて來た、既に元町から弓町一丁目の大半を焼きつくし將に高臺

にのぼらんとして居る、一方の方はもはや高臺に移つて高い下宿屋を焼いて居る、此の時駆けつけて居つた警官の一人熱心に防火につとめて居つたが事いよゝ急なりと見るや大聲叱呼して火を消してくれ火を消してくれ國家のためだ火を消してくれと、絶叫した、其熱誠面にあふれ見る人きく人を奮ひたゝせた、誰か黙視して居られやう青年團員は倒れんとする家によちのぼり斧を揮つて破壊につとめた、太いつかを柱にいはいては大勢力で家をひき倒した、警官の激勵する聲は赤心のほとばしるのである、女も男も働かないでゐられない、家々のバケツを持ち出し湯屋から湯をくみ出し、家々の風呂の水さへくみ出しかけた、石垣を崩しては石をなげ土手をくづしては土をかけ暫くは猛火と戦つた、が猛火も遂に人力に叶はずくて消し止める事が出來た、坂の下も亦春日町の青年よく戦つて狭い道路の南側までにて辛くもくひ止める事が出來た、本郷臺の人は皆ホット穌生の思をした、この熱誠ある警官の家族もすぐ近くに

任つて居たが、勿論警官は其避難先きは知らなかつた。國家のためには家族も家も顧る暇はないのである。

○こうした美談は至る處に現はれた日常と雖も職業のためには一身を犠牲にする事もあり家族を犠牲にする事もある、我が家に火が移ると聞かされても町のためにはと筒先を放さなかつた消防夫も人民のために妻子の行違を知らぬ警官も子供を救はんがために一命を抛つた先生も學校と運命を共にせんが爲めに我が家の焼けるのも顧みるに暇なく妻子の焼死するのをさへ救ふ事が出来なかつた校長も、會社を死守して遂に火災より免れ得た會社員も、つくす處は皆同じである、職業は異れど

も職務に忠實を赤き心に變りはないいづれの職業にたづさはる人でもかねてよりかうした覺悟を持たない人はない、それがかゝる非常の場合に遭遇すると明かに認められるのであるたゞ其覺悟に強弱の差あるは己を得ない事である、此度の事變は明かに人の心の底を暴露した、親切な人、不親切な人、公德心のある人、利個的人、心の大きい人、小さい人、大勇の人、小勇の人、知者も、無知者も自分を覆ふ事は出来なかつた、加ふるに不慮の出來事に心奪はれて日頃の覺悟に似ず不覺を取つた人もないとは云はれない、此際にあたつてかゝる美談を忘れず日頃の覺悟を一しほかたぐせんと思うのである。

本願寺託兒所について

記

者

未曾有の大震災はあらゆるものを破壊した、少くとも凡ての文化の進歩を妨げたに相違ないが幼

兒に關する事業は最も大なる打撃を受けたに相違ない、九月一日の夕四方火にかこまれながら幼兒